

#### 4 急速に眼球圧排と視力障害をきたした眼窩骨膜下血腫の2例

橋本 由華・本山 浩・森田幸太郎  
阿部 博史・高橋紳一郎\*・川崎 克\*\*  
立川総合病院循環器・脳血管センター  
脳神経外科  
立川総合病院耳鼻咽喉科\*  
長岡赤十字病院耳鼻咽喉科\*\*

眼窩骨膜下血腫は比較的稀な疾患であり主に眼窩部の鈍的外傷を原因として生じることが多いが、非外傷性のもので慢性副鼻腔骨洞炎を既往歴としてもち突然発症する症例もある。今回、外傷性、非外傷性の眼窩骨膜下血腫の各々1例をほぼ同時期に経験したので報告する。

1例は77歳女性で頭部外傷後、脳挫傷を伴い眼球の突出も著明であったが眼圧の程度も軽度であり保存的に自然寛解した。

他1例は66歳女性で慢性副鼻腔炎加療中、眼痛を主訴に急激な眼球の突出、視力障害をきたし緊急に血腫除去術を施行した。急速な眼球突出、視力低下をきたした症例ではcoronal, sagittal CT/MRIが診断に有用であった。

2症例とも血腫による眼球の変形が強い眼窩骨膜下血腫であり、眼窩上壁に沿う凸レンズ上の境界明瞭な造影されないmass lesionとして認められた。また急速な眼球突出、眼圧上昇、視力低下を認める場合、早急な血腫除去が必要である。

#### 5 寛解過程を詳細に画像で追跡しえた静脈洞交会を含む広範な静脈洞血栓症の2例

萱森 裕美・森田幸太郎・本山 浩  
阿部 博史・高野 弘基\*・三角 茂樹\*\*  
立川総合病院循環器・脳血管センター  
脳神経外科  
同 神経内科\*  
立川総合病院放射線科\*\*

〔症例1〕50歳、男性。くしゃみに引き続いて、急性の頭痛と嘔吐を呈したが、神経局所徴候なかった。頭部単純CTで脳実質に変化なかったが、両側横静脈洞と静脈洞交会に著明な高吸収

(hyperattenuation sign)を認め、硬膜静脈洞血栓症が疑われた。

〔症例2〕53歳、男性。増悪進行する頭痛を呈したが、神経局所徴候を認めなかった。頭部単純CTで脳実質に変化なく、両側横静脈洞と静脈洞交会にhyperattenuation signを認め、硬膜静脈洞血栓症が疑われた。

本2例では、3D CT venographyにおけるmaximum intensity projection (MIP) imagingで上矢状静脈洞、両側横-S状静脈洞の血流が見られず、硬膜静脈洞血栓症と確定診断した。深部静脈系は開存していた。ヘパリン持続静脈注射に続きワルファリン内服による抗凝固療法を施行した。頭痛は数日で軽減した。3D CT integral imagingで上矢状静脈洞、両側横-S状静脈洞の血栓が消失し、血流が回復する経過が明瞭に追跡できた。

#### 6 FLAIRで髄液が高信号を呈したがCTで異常がなかった3例

林 敏彦・奥泉 譲・木原 好則  
田崎晃一郎

県立中央病院放射線診断科

MRI (FLAIR)で脳脊髄液が高信号となる原因は、①病的な状態(くも膜下出血、髄膜炎など)、②アーチファクトによるもの(高濃度酸素投与、脳脊髄液や血管の拍動など)の大きく2つに分けられる。

今回我々は、FLAIRで脳脊髄液高信号を認めたが、説明し得る器質的疾患を認めなかった3例を経験したので報告する。

症例は60歳～80歳代の男性で、原疾患は2例が脳梗塞、1例が内頸動脈仮性瘤であった。1例がマスクでの酸素投与後(5l/分)、2例は気管内挿管後にMRIが施行された。

FLAIRでの高信号は、いずれも、左右対称でシルビウス裂、鞍上槽、脳溝内に認められたが、脳室内(側脳室、第3脳室、第4脳室)に指摘できず、高濃度酸素投与が原因と考えられた。また、酸素マスク投与例での信号強度は、気管内挿管2例と比較し低く、酸素濃度に信号強度が相関するという

過去の報告とも一致していた。

今後 FLAIR で髄液の高信号を呈した症例に対し、器質的疾患以外に、高酸素投与によるアーチファクトを考慮する必要性を示した3症例であった。

## 7 ガドリニウム造影剤を用いて内頸動脈ステント留置術を行ったヨード造影剤過敏症患者の1例

鈴木 亮・森田幸太郎・本山 浩

阿部 博史・高野 弘基\*

立川総合病院循環器・脳血管センター

脳神経外科

同 神経内科\*

【はじめに】我々はヨード造影剤過敏をもつ内頸動脈狭窄患者に対して、ガドリニウム (Gd) 造影剤を用いて脳血管内治療を行い良好な結果を得た1症例を経験したので報告する。

症例は75歳、男性。心臓弁膜症の既往があり、以前の心臓カテーテル検査でヨード造影剤使用による重篤な副作用が認められていた。平成22年初旬、心不全が悪化し心臓手術が予定されたが、術前評価で左内頸動脈高度狭窄が認められ同部位の脳血管内治療を優先する方針とされた。既往から治療にはGd造影剤が選択された。十分な術前計画といくつかの工夫により良好な造影効果を得て治療は完遂され、術後合併症なく独歩退院した。

【結論】ヨード造影剤過敏症患者に対する脳血管内治療にGd造影剤を用いることは有用な選択肢となりうる。一方で保険適用外であり、腎不全患者での重篤な副作用が報告されるなどその使用には慎重な検討が必要と思われた。

## II. 特別講演

### 1 腹部の画像診断の極意

横浜旭中央総合病院放射線科部長

佐藤 秀一

## 2 脳血管内治療のための画像診断のキーポイント：より効果的な治療のために

大分大学医学部附属病院

放射線部 准教授

清末 一路

## 第70回新潟癌治療研究会

日時 平成22年7月24日(土)

午後12時30分～

会場 朱鷺メッセ

新潟コンベンションセンター

中会議室301

## I. 一般演題

### 1 放射線誘発と考えられた下顎骨悪性線維性組織球腫の1例

小山 貴寛・星名 秀行\*・児玉 泰光

小野 和宏\*\*・高木 律男

林 孝文\*\*\*・朔 敬\*\*\*\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科

顎顔面口腔外科学分野

新潟大学医歯学総合病院インプラ

ント治療部\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科

口腔保健学分野\*\*

同 顎顔面放射線学分野\*\*\*

同 口腔病理学分野\*\*\*\*

放射線治療で生じた下顎骨骨髓炎に続発したと推測される悪性線維性組織球腫 (MFH) の1例を経験したのでその概要を報告する。患者：44歳、女性。主訴：右側下顎角部の腫脹。現病歴：1989年25歳時右側頸部悪性リンパ腫。放射線・化学療法で寛解し経過観察終了。2008年8月に右